

博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学
研究科名 人間科学研究科
申請者氏名 金子祥之
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目 洪水常習地域の災害文化と生活環境史
Disaster Culture and Environmental History in Flood-prone Regional Societies along Tone River

論文審査員 主査 鳥越皓之 早稲田大学教授 文学博士（筑波大学）
副査 蔵持不三也 早稲田大学教授 博士（人間科学）（早稲田大学）
副査 谷川章雄 早稲田大学教授 博士（人間科学）（早稲田大学）

本研究は主に日本民俗学的方法論と研究史を用いて、昨今、社会的に研究の重要性が認められている「災害」について分析・記述をしたものである。ただ、論文のタイトルに「環境史」という用語が含まれているように、その分析手法に、社会科学（主に社会学）の分野で発展した環境史的手法も加味されている。

本論文は、その研究分析の対象地を利根川の荒川水系に求めている。荒川はその文字通りにたいへん荒れた川で、しばしば災害が常襲（論文のタイトルに常習という用語が使われているが、それはこの分野の研究ではこの用語を用いることが多いため）し、地元ではその対応策について歴史的に蓄積された経験があり、その経験を貴重なものとみなし、この地域を研究対象地に選んだものである。

本論文は、つぎのような問いのもとに研究されたものである。この地域では災害（具体的には水害）が繰り返し押し寄せつづけた地域であるにもかかわらず、どうして人びとはそのような場所に住みつづけることができたのか、という問いである。このような問いのもとに、本論文を構成する各章で論が展開されている。

第1章では、民俗学などの人文系分野の災害研究の既存の研究を整理してあきらかにすべき問題点を提示している。すなわちこの分野の研究では、国や地方自治体がおこなう防災政策や対策と、住民の地域生活の現実との間に大きなズレが生じており、このズレを修正することが施策の効果を考えるうえで喫緊のことがらとなっていることがすでに分かっている。それをふまえて本論文では、このズレを防災の理念の方に合わせていくのではなくて、住民の生活の実態の方に合わせていくべきであるという立場にたっている。もちろん、どちらか一方だけが正しいというのではなくて、現状では「そもそも災害とは」とか、「本来あるべき対策とは」という理念が先行しがちな研究の実情において、このような住民の生活実態から災害のあり方を考える立場は貴重であると思われる。本論文は、人びとの生活の立場から環境利用を分析する視角であるので、タイトルの一部にある「生活」の環境史の方法を用いることになったのである。

このような研究上の位置づけをしたうえで、第2章から5章までは事例の研究となっている。事例を通じて課題をあきらかにするとともに、地域住民が蓄積してきた災害に対する知恵を得るためである。

第2章において、洪水というものを的確に把握するために、洪水についての常識とは別の方向からこの研究を導入させている。すなわち、洪水は地域生活にあきらかにマイナスの側面を与えるのだが、実際はプラスの側面もあり、プラスの側面とはなにかということを考えるとところから入っている。これは行政の施策立案者には考えつかないことがらである。しかしながら、文化人類学者や民俗学者にとっては、これは意外なことではない。嵐があると海辺にでかけてなにかよい“宝物”が流れ着いていないかと確かめるのは、世界の各地でみられる現象であるし、河川では大量の巨大な魚が手に入るチャンスでもあるのである。魚も安全な場所から流し出されているからである。この洪水のプラス・マイナスの両面を把握しないと、本来の洪水政策ではないという考え方でこの章では「大水の寄り物」の具体例を示している。そして「大水から利益を引き出す対処」と「大水による水害への対処」とは共通の要素をもってると指摘する。これはとても新鮮な指摘であると判断する。

第3章と第4章は利根川下流のいわゆる「輪中」地帯の人びとの災害対応を対象としている。これらの章は丁寧な事実記述がなされており、災害地帯に住む人たちの実態が如実に示されている。3章では災害対応の共同組織についての記述であり、組織論的なものとなっている。どうしても住民の属性の違いによって利害が対立するので、それをどのようにクリアーしながら共同性を保持するのかについて分析されている。4章では災害対応としてのその象徴である水神がとりあげられている。地域全体の総鎮守社として水神が祀られているのである。総鎮守社ということは、それに地域全体が組織的に対応する必要があることを意味している。災害対応技術が進んだからといって、地元の人たちが水神祭祀を中止しない意味についてここでは論じられている。たとえば、この地域の村落が相互に対立をしたときに、地域全体を巡行する臨時の水神祭祀が営まれるというような指摘はとても興味深い指摘といえよう。コミュニティにおける結束性を毎年行われる祭祀によって確認するという機能を有しているという結論である。

第5章はひとつの村をとりあげ、災害について総合的にとりあげるという方法を用いている。それは圃場整備事業という事業から、災害文化という価値観に関わるものまでひろく論じられている。そしてそこには領土保有という土地の所有のあり方を基本においた論点の立て方がなされている。この章では、災害対応だけではなくて、そこに住んでいたら当然のことであるが、日常の平穏な場における予防としての対応についての分析がかなりの比重を占めている。施設の新設や道路・鉄道工事においてそのような配慮がなされていることが指摘されている。

全体をまとめると、以下のとおりである。すなわち本論文は、「災害の防御」という視点に限定されなくて、それぞれの地域社会がいかにして災害とかかわってきたのかを分析したことになる。人びとの災害対応は、自然を管理しつくすことによって災害をなくすというのではなくて、災害そのものを生活のなかに組み込みながらその地域社会の秩序を保持するという仕組みになっていることを本論文は指摘している。ところが最近の災害を防ぐための自治体による土木工事は、住民の知恵の蓄積とまったく関わりないところで行われており、住民を安心させつつあるが、その結果、住民はその蓄積された知恵を喪失しつつある。そして

もし、現代土木の能力を超えた災害が起こったときに、すでに住民が対応するための知恵と技法を喪失していたらたいへんなことになる、本論文は警鐘を鳴らしている。

本論文は緻密な実証研究にもとづき、説得性のある論理構成をしたうえで、現在の日本民俗学および環境社会学の理論的研究史を十分にふまえたものであり、当該学会に十分に寄与できる研究水準であると評価できる。また、政策論としての実践性においても優れた示唆を与えるものと判断できる。

なお、本年の11月に正式の発表となったため、本人の「学位申請書」（10月提出）には記載されていないが、本論文の第5章の元となった論文が「日本村落研究学会の奨励賞」を受賞した。この学会は歴史が古く、社会学・経済学・人類学などの村落にかかわる研究者にはよく知られている権威ある学会で、その学会から賞をうけたことはとても名誉あることである。

なお、本論文の一部が掲載された主な学術論文は以下のとおりである。

- [1] 金子祥之：むらの領土管理にみる災害文化活用の論理—利根川下流域の神田村落を対象として、村落社会研究ジャーナル、Vol.19,1, pp.13-24(2012)
- [2] 金子祥之：川のなかの定住者たちの災害対応—利根川・布鎌地域の水神祭祀、鳥越皓之編 自然利用と破壊（環境の日本史5 近現代・民俗）吉川弘文館、所収、pp.200-226(2013)

以上のことを総合的に判断し、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上